子どもの本の可能性を拓いた女性たち

国境に子どもの本の橋をかけたイェラ・レップマンと読書のインクルージョンをめざしたトーディス・ウーリアセーター

攪上久子

はじめに

二〇一一年三月十一日の東日本大震災それに続く原発事故のあと、被災地や被災した子どもたちに本を届けようという動きが日本各地から湧き上がった。それは、おどろくべき数、大きなうねりであった。初めに声を上げた日本ユニセフ協会には二十三万冊の児童書[1]、岩手から声を上げた三・一一絵本プロジェクトいわてには、約二十四万冊[2]という膨大な児童書が全国から送られた[3]。筆者もユニセフがプレスリリースした数日後、ユニセフホールを訪れ、積み上がった本の山を見る機会があったが、日本中にこんなにも被災した子どもたちを本で励まそうと思う人がいるのかと、その人たちの本に託す子どもたちを思う気持ちに、涙が流れた。その気持ちとは一体どんなものだったのだろう。日本の人々は子どもの本に、お金や食料や衣服、日常用品と違う、どのような願いを込めて被災地に届けたのだろうか。震災後たくさんの子どもの本が被災地の子どもたちに届けられた動きは、日本社会が積み上げてきた子どもの本に対する信頼と成果を示す一面とも言えるだろう。

ここで取り上げるＩＢＢＹ（The International Board on Books for Young People）という団体は、悲惨な状況下にある子どもたちChildren in Crisisに本を届ける活動をしてきた先駆的な国際組織である。その活動を創った女性がイェラ・レップマン（Jella

Lepman）という一人のユダヤ人女性であった。第二次世界大戦直後のドイツで、レップマンは子どもたちに精神の栄養となる「本」を手渡すことを唱えた。ここでは自伝の記録を中心に、今日に引き継がれている彼女の理念が実現してきた、国境を越えて子どもの本と子どもをつなぐ活動について考察したい。これは戦後七十年を迎える日本を振り返ることにもなるだろう。また、被災地の子どもたちに、本がどんな力を発揮していくのかということの示唆を与えるものにもなっていく。

そして、この理念に重なるように、ＩＢＢＹ障害児図書資料センターが一九八五年ノルウェーに立ち上がった。この設立に尽力したノルウェーの女性トーディス・ウーリアセーター（Tordis Ørjaseter）は、どんな願いをこのプロジェクトに持っていたのだろう。

筆者はＩＢＢＹの障害児図書プロジェクトの一つである、優良な障害児図書コレクション（Outstanding Books for Young People with Disabilities）を「世界のバリアフリー絵本展――ＩＢＢＹ障害児図書資料センター推薦図書展」として、十二年にわたり全国巡回し、これまでに一五〇箇所あまりで開催し、日本社会に紹介してきた。この論文は、その実践を通して、出会い、知見し得た事である。

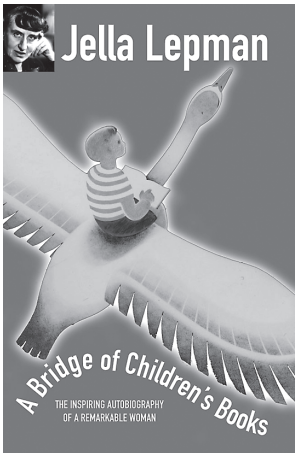
故郷に架けた子どもの本の橋――イェラ・レップマン

イェラ・レップマン（一八九一～一九七〇）は第二次世界大戦直後の混乱の敗戦国ドイツで国際児童図書展示会（世界各国の子どもの本の展示会）を開催し、その展示会をドイツ各地に巡回した。そして、これらの本が恒久的に展示できるようにと、一九四九年ミュンヘンに国際児童図書館（ＩＪＢ：Internationale Jugendbibliothek）を開館し、さらに一九五一年子どもの本の関係者の国際会議を企画し、これがそのままチューリッヒでの国際児童図書評議会（ＩＢＢＹ）設立につながった。この二つの組織は世紀を超えて、レップマンの理念を継承し、現在も世界中の子どもと子どもの本をつなぐ架け橋として活動を続けている。この理念とは「本を通した国際理解・異文化理解」「子どもの本は人間が引く様々なボーダーを超える力がある」というものであるが、人間にとって何かの理念とは、はじめからそこにあるものというよりも、活動の中で作り出されていくものであろう。レップマンのその軌跡を、特に子どもへの眼差しの中から追ってみる。そして展示会・図書館・世界のネットワークが実現していく中で、実際に子どもの本は子どもたちにどんな力を発揮したのだろうか。記録からその点を整理してみたい。

（1）レップマンの経歴と初動期

イェラは一八九一年、ドイツのシュトゥットガルトで、工場主であり民主的な考えの持ち主であったというユダヤ人の父を持ち、三姉妹の次女として生まれた。地元の王立学校を経てスイスの寄宿学校で教育を受け、十七歳の時に工場で働く外国人労働者の子どもたちのために国際読書室を開設している。

第二次世界大戦の直前に、ルイス・レップマン商会の経営者であったドイツ系アメリカ人グスタフ・レップマンと結婚したが、三十一歳で未亡人となる。六ヶ月の長男と三歳になったばかりの長女、二人の子を育てるため、レップマンはジャーナリストの仕事に就き、新聞や雑誌の記事、映画批評などを執筆した。一方、児童文学作家としても活動を始め、一九二九年には初の児童書『寝坊した日曜日』を出版。また、政治的な方面でも活躍し、ヴュルテンベルク州ドイツ民主党女性グループでは指導的役割を果たし、帝国議会にも立候補したが、後の大統領テオドール・ホイスに敗れている。ヒトラーの台頭で、ユダヤ人であるレップマンは仕事を失い、一九三六年二人の子どもと共にロンドンに亡命する。その後、二人の子どもはロンドンの寄宿舎に入り、以後共に暮らすことはなかったという。



Jella Lepman, *A Bridge of Children's Books*

終戦後、国際ジャーナリストチームとして、ロンドンで「女性と世界」という雑誌の創刊号の準備をしていた時、レップマンはアメリカ軍からある要請を受ける。それはアメリカ占領地域の女性と子どもの文化的教育的問題に対する顧問として、ドイツのバート・ホンブルグにあるアメリカ軍司令部に行ってくれないかという内容だった。レップマンはこの話をきくや、ヒトラー政権下で祖国を去った時のこと、その後祖国に起こった非道な出来事を思い、激しい恐怖と怒りに、手で顔を覆ってしまったという。二週間あまり、彼女はこの話を受けるかどうか苦しむ。

彼女を決断させたのは、イギリスの援助委員会を通して、知人の子どもたちをドイツから逃し、その子どもたちを駅に迎えに行った時の思い出だった。八歳から十歳の五十人あまりのドイツの子どもたちは、みな、ドイツを離れる時に母親がくるんでくれたのであろう暖かいマントと帽子に身を包み、おとなしく迎えに来た人たちに次々に引きとられていった。ロンドンの駅で繰り広

げられたこの光景は、一方で愛の証であると同時に、子どもたちからの激しい告発として、レップマンの心に深く突き刺さった。

後ろを見てはいけない。前を見て、子どもたちからはじめなければいけない。[4]

一九四五年十月二十九日、レップマンは九年ぶりに、祖国に戻った。レップマン五十四歳。そしてレップマンは荒れ果てた祖国の視察の中で、危機の中にあって、なおすばらしい存在である子どもへの、共感と尊敬を自分行動の力としていく。

フランクフルトは全体がひとつの瓦礫の山のように見えました。瓦礫は心と胃に重くのしかかり、私の心を震わせました。……街角にかがみこみ、おずおずと瓦礫の山から木材を探している人たちは、しばしば男女の見分けもがつきませんでした。私たちを気にかけるものは一人もいませんでしたが、たった一度、一人の小さな女の子が、私たちに手をふりました。その子は半分壊れた階段に座って、なんと信じがたいことに、その手に秋の花を一輪持っていたのです……。[5]

レップマンにとって、ロンドンに亡命してきた子どもたちのこと、そしてこの小さな女の子のことは、彼女のそれからの活動への邁進を支える、忘れがたい大事な思い出となった。自分が豪華な食事を与えられた時、何事もなかったかのように、過去の過ちを忘れたかのように振舞う人たちに会った時、レップマンの脳裏には必ずこの子どもたちの姿が見えていたようだ。

レップマンはジープでの視察の中で、何時も子どもたちを見逃さず、目を注いだ。ジープに群がり片言の英語で話しかけてくる子、痩せこけてすさんだ表情の子、恐ろしい体験を無表情に語る子、ギャング集団で暮らす子、崩れた家や洞穴や、階段の下で暮らす子など。

それにもかかわらず、彼らの目は子どもの目でした。これは驚くべきことでした。ほとんど理解を超えています。[6]

(2) 国際児童図書展示会（世界各国の子どもの本の展示会）開設

この子たちに何ができるだろうか……幾人もの著名な知人たちとの会談の中で「精神の栄養」ということにレップマンは気持ちが傾いていく。視察の報告のために、アメリカ軍の司令官会議に、唯一の女性として出席したレップマンは、そこで様々な国の良質な子どもの本の展示会を提案する。

この混乱した世界を正常に戻すために、まず子どもたちからはじめさせてください。そうすれば子どもたちはおとなに道を示すでしょう。[7]

将軍から「資金をどうするのか」と尋ねられた彼女は、お金をかけずに本を集めること、つまり各国にお願いして本を送ってもらうという提案をする。将軍はさらに彼女に尋ねる。「あなたが本を送ってくれと頼もうとしている国々の大半は半年前までドイツと戦争をしていた。おそらく今でも好意的ではないだろう。それでも本を送ってくれるとあなたは信じるのか」と。レップマンはこう答えている。

もし、戦争が本当に終わったのなら、そして民族の平和的共存を信じるというなら、これらの子どもの本は、その平和の最初の使者になるのです。[8]

レップマンは二十ヶ国に向けて様々な言語で複数部の手紙を送った。

拝啓

この書面は、尋常ならぬお願いを申し上げるものですが、格別のご理解をいただけますようお願い申し上げます。

私たちは、ドイツの子どもたちを、ほかの国々の子どもの本に出会わせる道を探っております。ドイツの子どもたちには、ヒットラー時代の本を排除して以来、全く本がないと言っていい状態です。また、教育者や出版社も、指針となるべき自由世界の本を必要としています。この戦争の責任は子どもたちにはありません。子どもたちへの本は、最初の平和の使者となるでしょう！　集められた本で展覧会を行います。まずはドイツで開催し、その後、おそらく他の国々にも巡回するでしょう。外国語の障壁を超えるために、できれば絵本や挿絵のある本をお願いしたいと思います。しかし、良い物語文学も、読書会をすることで、子どもたちにも理解できることでしょう。ドイツの出版社が、これらの多くの本の翻訳出版権を得ることができるよう希望します。

またお国の子どものスケッチや絵画もお願いしたいと思います。これらの絵は、世界共通のことばを話し、子どもたちを喜ばせるでしょう。[9]

はじめの返事がフランスから届いた時、レップマンは一分ほど封を切れなかったという。「フランスは喜んで協力いたします。出版社にはすぐに手紙を出しました。本が十分な冊数集まり次第、

専門家に選ばせて、すぐに送ります。」ノルウェーからは「ノルウェーの子どもの本は戦争の犠牲になりました。出版社にすら本がありません。そこで、直接子どもたちに頼んで本棚から本を探してもらうことにしました。」二十ヶ国のうち十九ヶ国が無条件に賛成し、たった一国ベルギーからは「私たちは二度もドイツに侵略されました。お断りします。」という手紙が届いたが、レップマンはドイツの新しい世代を育てることで、三度目の侵略を恐れる必要はないという新しい手紙を書き、ベルギーからはとりわけ良質な素晴らしい本が届いたという。この時合計約四千冊の本がドイツに送られてきた。

〈子どもの本はボーダーを超える〉〈子どもの本による国際理解〉これは現在のＩＢＢＹの柱になっている理念である。国境というボーダーがもたらす最大の不幸は戦争であるが、レップマンは、この時、子どもの本は国境を越え、平和を構築する架け橋になることを確かに実感したのだろう。一九四六年七月三日ミュンヘン「芸術の家」を会場に、国際児童図書展示会（世界各国の子どもの本の展示会）が開会した。

午後、子どもたちに扉が開かれました。メルヘンの国に入るように顔を輝かせて、子どもたちが押し寄せました。……何キロも歩いてきたその靴は埃まみれでした。……子どもたちの笑顔やはしゃぐ姿は、いつまでも見ていても見飽きることはありませんでした。[10]

レップマンは子どもの本の中でも絵本はとりわけ文化を超える、言語の壁を越える力があると考えたが、各国に送った手紙からもわかるように、子どもの絵も会場に展示した。送られてきた絵を選ぶ段階で、レップマンは「賄賂のきかない観察者」[11]である子どもたちの絵から、各国の事情をはじめ、たくさんのメッセージを受け取った。この絵本・絵を展示の核にする考え方も、今日ＩＢＢＹやＩＪＢに受け継がれている。

毎朝「芸術の家」の前には長蛇の列が出来ました。すべての年齢層、すべての階層の人がやってきました。[12]

このことばから、レップマンは子どもの本が文化や国境というボーダーを超えるだけでなく、一つの国の中のボーダー（階層や年齢など）をも超える力があることを既につかんでいたといえよう。展示会は、その後ドイツ国内を六都市巡回し、計七ヶ所の入場者は百万人を超えたという。その中の入場者の一人であった、小さな女の子の発した言葉によってレップマンの理念は確立したのであろう。一九四六年十二月六日午前、ベルリン会場展示会の

初日の出来事であった。

……サンタクロースとトナカイのそりが描かれた踊り場にやってくると、女の子は突然立ち止まり、深く息をして言いました。「これが平和ね。」そしてもう一度「これが平和ね。」[13]

(3) ミュンヘンに国際児童図書館（IJB）と国際児童図書評議会（IBBY）設立

図書展が成功すると、レップマンはそれらを恒常的に見ることができる場所つまり図書館を作りたいと考えた。展示会の「子どもの本を通じた国際理解」が高く評価され、レップマンはアメリカに招待されて各地で講演をし、のちの図書館設立への大きな後ろ盾となる人たちと会していった。幾多の曲折を経ながらロックフェラー財団やルーズベルト夫人などの援護で、一九四九年九月十四日、ミュンヘンに国際児童図書館が開館する。開会式に招待された各国の子どもたちの代表は、自分のお気に入りの本を原語（母語）で朗読した。アメリカの少年は『はなのすきなうし』、スウェーデンの女の子は『ニルスのふしぎな旅』、イタリアの小さな男の子は『ピノキオ』、スイスの女の子は『ハイジ』、ドイツの男の子は『エミールと探偵たち』、フランスの女の子は『ぞうのババール』を。自分たちの母語を大事にすること、これもまた今日、IBBYやIJBに引き継がれている理念であり、IBBYの読書支援の中には、本の少ない国において母語で書かれた本の出版を後押ししているものも多い。

また、レップマンは子どもの本による国際理解をためす理想的な実験室は、絵本の部屋だと述べている。この部屋には字の読めない六歳以下の幼い子どもばかりでなく、すべての年齢層の子どもが座っているが、絵本の中に描かれた世界はみな子どもたちのものであり、ここには既に「子ども国際連合」の姿がある。大人はこれを手本にすればいいのだ、と述べている。この他この図書館には、絵画のアトリエや小劇場、本について討論する部屋などもあった。それらすべて、従来の図書館のありかたの枠を大きく外れるものであったが、子どもを支えている親の集まりも開催し、親の会も結成されるに至っては、図書館員の驚嘆も大きかったようである。

子ども国際連合を作るというこのことも、レップマンは行動に移し、子どもたちにある日お知らせが配られた。

みなさんは、国際連合を知っていますね。六十ヵ国の代表が集まって、民族間の理解と世界平和のために力を尽くしています。国際児童図書館では、実験的に「子ども国際連合」を作ってみたいと思います。残念ながら、この試みのために、

六十ヵ国から子どもたちを飛行機でミュンヘンに連れてくることはできません。そこで、みなさんに、代わって、これらの国の代表をしてもらおうと思います。とくに関心のある国、大事だと思う国を選んでください！　代表は各国二名とします。飛行機の時代は人々の間の地理的な距離を縮めました。これからはお互いをよりよく知り、理解し合うことを学ぶ、それが重要です。「子ども国際連合」では、毎月総会を開き、自分たちで選んだテーマについて討論します。国際児童図書館の本や雑誌、写真、地図、レコードを自由に使えます。このことに興味のある十二歳から十六歳の少年少女は図書館に申し出てください。……[14]

初めに自分たちがどの国の代表になるかの争奪戦の後、子どもたちは「自分の国」について学ぶべく、図書館内の本はもちろん領事館・旅行会社・航空会社・博物館へと走ったという。このことは、日本でも一九九八年二月、長野市を中心に開かれた冬季オリンピックで、国際的イベントと市民との融和、そして一過性ではなく継続的な「国際理解・親善」につなげる工夫として「一校一国運動」「一店一国運動」が展開され、現在では国際的な拡がりをみせていることを思い起こさせる。第一回子ども国際連合会議のテーマは子ども国際連合から青少年国際連合への名称変更であったとう。レップマンは「子ども」という言い方の中に、幸せな守られたイメージを持って使ったのだが、ドイツの子どもたちからは以下のような反発が出された。「私たちはもう子どもではない。戦争中も戦争のあとも、六つになれば子どもではいられなかった。あの頃は、まだ子どもでいたかったのに！」。それからは「世界平和に軍隊は必要か」「人種隔離は正当化されるか」「世界語は必要か」「私たちと児童憲章」などをテーマに議論は深められ、彼らは批判だけでない鋭い洞察を披露していった。このようにドイツの子どもたちが戦後、正々堂々と正面から大人が避けたいテーマに向かって突き進んだ姿が記録されている。これは、環境さえ整えれば、子どもたちのこうした力を育て引き出せることを実証している。このことは、大震災、特に先の見えない原発事故の中で育つ、福島の子どもたちへのヒントにならないだろうか。

この図書館で二十年間司書として勤め、日本セクションの責任者をしていたガンツェンミュラー文子氏は、この図書館開設について以下のように述べている。

至るところにあって、道路も見分けられなくなっていたがれきの山は一九五一年ぐらいまであったそうです。皆栄養失調で生存の危機にさらされ、一九四八年にはミュンヘンの学生

一万五千人が社会のため、自分のため、大々的な食料要求のデモ行進をしています。一九四九年からドイツマルクが流通し、その後ドイツは徐々に経済復興の道をたどるのですが、反面、貨幣改革のため、特に多くの老人たちが生活の糧を失い、路頭に立ちました。このような戦後の困窮した時期に、子どものための図書館が誕生し、しかも創立者はユダヤ系ドイツ人の女性ということは、やはり驚くべきことだと思います。[15]

さらにレップマンはその活動のエネルギーを止めることなく、一九五一年、子どもと子どもの本を取り巻く人たちの「協調」が、子どもの本の世界では一番欠けていることとして、作家・画家・出版者・書店・図書館員・教育者・美術教育者・心理学者など子どもの本に関心のあるすべての人たちが集うべく国際会議を模索し、秋には六十通の招待状を発信する。反響は大きく、子どもの本関係者二五〇人が集い十一月十八日、国際児童図書評議会（IBBY）設立が決定された。その第一回総会は、一九五三年スイスのチューリッヒで開かれた。設立の際の会員にはケストナー、アストリット・リンドグレーン、リザ・テツナー、ベッティーナ・ヒュールマンなど、著名な作家や編集者などが名を連ねている。IBBYは今日七十七支部を持ち、レップマンが唱えた〈危機にある子どもたちにとって本が精神の栄養になる〉という原点、また〈子どもの本を通じての国際理解が平和を構築していく〉という理念を忘れることなく、各国それぞれの情勢の中で、あゆみつづけている。

読書のインクルージョン――トーディス・ウーリアセーター

（1）ダグトール君のあゆみと北欧の福祉思想

一九五五年、ノルウェーのウーリアセーター夫妻に長男ダグトールが生まれた。北欧は高度な福祉国家のイメージがあるが、はじめからそれがあったわけでない。このダグトール君には自閉症という「障害」[16]があったが、彼のあゆみはノルウェーの福祉が、六〇年代の施設収容型福祉から、八〇年代後半限りなく家庭に近い地域で共に生きていく地域福祉型へと転換していったあゆみにほかならない。ノーマライゼーションやインテグレーション・インクルージョンという概念もそこから生まれてきたといえる。

ダグトール君が生まれた時、母であるトーディス・ウーリアセーター（一九二七～）は大学で心理学や教育学を学ぶ学生であり、妊娠時結核を患っており、当時の治療を受けながら出産し、分娩もかなりの難産だった。母は一年間ぐらいは、子どもの成長に何の疑いも抱かず、九ヶ月の時には大学の保育所にダグトール

君を預けた。一年ほどの入所期間中、彼はほとんど言葉を話さず、トーディスが学業を終えるころに、たまたま職員の休暇で保育所を手伝ったトーディスは、自分の子を客観的に見て、寝込んでしまったほど、他児と我が子は様子が違っていた。三歳になってもトイレトレーニングができず、心理士に相談。そこからトーディスに、自分の子が受ける療育の内容への疑問や哀しみが重なっていく。専門の機関に相談すればするほど、場も内容も、閉じた療育を受け、彼の人間としての成長が見られず、問題行動が大きくなっていく。特に、一九六〇年代、まだ世界的に自閉症研究は進んでおらず、親子、特に母親との関係が一見冷たく見える自閉症の親子関係の様子から、自閉症の原因を母親の愛情不足、育て方のせい（母原論）とする説が唱えられた時期があり、トーディスもそのことで、かなり苦しんでいる（日本でもどれほどたくさんの母親が、同じように涙を流したであろう）。その間、トーディスは学生から大学の教員になっており、特別支援教育の専門家として歩み始めている。しかし、トーディスはやがて、ダグトール君が受けてきた訓練や療育、家族や地域から切り離された施設の中で彼が生活を送ることで、人として大事なことが失われていくことに気づいていく。トーディスは当時を振り返り、多くの努力をしてくれた専門家に感謝しつつも、自分たち両親も含めて、「たぶん、わたしたちはまちがいを犯したのです」と言い切る勇気を持った。ダグトール君の問題行動は家庭が崩壊してもおかしくないくらい酷しい状態のものも多く、それでもトーディスは、冷静で理解があり、仕事や困難を分担してくれる夫と、ダグトール君を一人の兄として受け止めている二人の妹、この家族に支えられながら、仲間と息子のためにホーム[17]（限りなく家庭に近い形で、地域で共に生きていく施設）を建設する。週末には家族のもとにかえりつつも、親が亡き後の本人の暮らしに備え、また子どもを一人の生活者と認めるのならば、家族が幼児のように抱え込むことは、親子どちらにも良いことでないと考え、そこを彼の主たる住処とする。

トーディス・ウーリアセーター近影

（2）本・レポート発表からIBBY障害児図書資料センターへ

一九七六年、ダグトール君が二十歳になった時、トーディスは

「いま、わたしはあることを言葉に表そうと筆をすすめています。しかし、そうしている私は、正しいのでしょうか……我が息子ダグトールの世界について、あの子が経験したそのものを文章にしてみたいのですが、私にはできません。……私が書けるすべては、ダグトールによって与えられてきた私たちの経験についてです」という書き出しで、ダグトール君の二十年の生きてきたありのままを綴った本を出版した。[18] その本は、一人の自閉症青年の生い立ちとその母の二十年間の記録であると同時に、大型施設から地域で生きるホームや生涯教育と労働を保証したワークセンターの実現、そして北欧の福祉の象徴的理念であるノーマライゼーションが推し進められていった歴史そのものである。

本に綴るのは難しく、書こうか書くまいか随分迷いました。ダグトールに「あなたの生い立ちを書きたいのだけれど、いいかしら？」と許可を得るために尋ねることはできませんし、しかも私たちの生活を遡って、悲しく惨めな月日について語ることは激痛が走る手続きでした。そうではありますが、息子の生い立ちについて語り、ダグトールの全人格を通してあの子が私たちに与えてくれた何かを本に記すべきと感じました。

この本の最後からふたつめの章で「あの子が文章の中で言葉を使い始めています」と書きました。この本はいくつもの国で翻訳され本を通してダグトールは今では、デンマーク語、英語……そしてこれからは日本語も話します！

これは、一九八九年日本語版が出版されたおり、トーディス・ウーリアセーターが、日本の読者に寄せた言葉である。[19]

そして、トーディスは、一九八一年、障害児図書関係者にとってのバイブルとも言える、子どもの本の世界における画期的なユネスコレポート The Role of Children's Books in Integrating Handicapped Children into Everyday Life. Unesco（日常生活に障害児を統合する際の児童書の役割）No. 1 in UNESCO's Studies on Books and Reading Series を世に発表する。

このレポートは当時ノルウェー国立特殊教育研究所の准教授であったトーディス・ウーリアセーターが、国際障害者年に子どもの本に関わる人すべて――編集者・作家・画家・図書館員――に、障害のある子どもと本をめぐる問題を正しく知ってもらい、世界中の障害がある子どもたちに、良い本をたくさん読んでもらうことで、国際障害者年以降長期的な計画と実行を促すために書いたものである。そしてイタリアのボローニャ児童図書展で、一九八一年国際障害者年に開かれた「本と障害児に関するセミ

ナー」の基調講演でプレゼンテーションされた。

この時同時に「本と障害児展」も開催され、展示本のカタログも発行されている。[20] ここでは二十ヶ国以上の国から、障害児に関する本（About）、障害児のための本（For）が寄せられているが、これはトーディスがＩＢＢＹ各国支部に手紙を書き、調査とその結果としての本の送付を依頼したのである。日本からもＩＢＢＹ日本支部ＪＢＢＹが依頼を受けて、調査研究し、About の本一六八点、For の本十四点を調査結果として送っている。この展示会では日本から送られた手作りの布の絵本・さわる絵本が大きな反響を呼んだ。[21]

この展示会やセミナーの実現にはさきのＩＢＢＹという団体が動いている。トーディスは、一九七九年夏頃から、国際障害者年に向けて「障害」のある人の教育や仕事や生活などに目が向けられるだけでなく、どんな「障害」があろうと、子どもたちは本に出会い、本を通じて自分たちの生活をより豊かにしていく権利があることにも目を向けて欲しいと願っていることを、当時のＩＢＢＹ会長に電話や手紙で直訴したという。その願いは通じ、ＩＢＢＹ会長から正式に当時トーディスが勤務していた、ノルウェー国立特殊教育研究所長に、ＩＢＢＹプロジェクトとして、この任について欲しいと要請があり、トーディスはこの一連のプロジェクトに仕事として自分の時間と力を注ぐことが可能になった。

この時に開かれた、本と障害児展とそのカタログの発行というプロジェクトの成功は、その後一九八五年、ＩＢＢＹとノルウェー国立特殊教育研究所の協力でＩＢＢＹ障害児図書資料センター設立に結びつき、さらに、展示会とカタログの発行は今日までこのセンターの中核をなすプロジェクトとして継続されている。[22]

トーディスは一九八五年、もう一つの重要なレポートと展示会を世に送り出す。Books for Language Retarded Children No. 20 in UNESCO's Studies on Books and Reading Series である。先の展示会もボローニャ開催後世界を巡回したが、この展示会もボローニャで開催の後、フランス・スペイン・アイルランド・フィンランド・スウェーデン・ノルウェーなどの国を巡回した。

トーディスが書いた二つのレポート、その中で取り上げている「統合」（integrate）という概念、さらに「障害」のある子どもたちを「言葉につまづきがある子どもたち」（Language Retarded Children）というテーマの立て方で考える視点、これらにはトーディスのダグトール君を育てた過程でつかんだ大事な見方や観点が包括されているといえよう。

「統合」という考え方の大前提には、「障害」のある子どもたちは、施設で隔離され　地域で孤立して生きていくのではなく、社会の中に参加して生きていくべきである、という主張がある。その実現のために本がどういう役割を果たしていくのかについては、

以下のように考えられる。「障害」が描かれることで、それを読む人が「障害」を理解するようになる。本の中で描かれる社会の中に、あたりまえに「障害」のある子どもたちが登場することで、社会の自然な有り様を学ぶ。いろいろな「障害」のある子どものために作られている本があることで（例えば見えない子どもたちのために、文字が点字となり、絵がさわれるようになっている本）、そういう子どもの存在を知る。そのような本が図書館や書店に置かれることで、そこが「障害」がある子どもたちも参加できる場所になっていく。出版社や編集者は、そのような本を出版することの必要性を知る。また「障害」のある子どもたちも、自分と同じ存在を本の中に見出すことで、己のアイデンティティを育むことができる。

「言葉につまづきがある子どもたち」という焦点の当て方のリストアップレポートの中で、特筆すべきは、この当時から「手話」を聴覚障害の人たちにとっての「自分たちの言語＝母語」であると捉えて、子どもたちが絵本で自分の言語と幼い時から自然に出会っていくように、聴覚障害の子どもたちも、自分たちの言語である手話がテキストとして書かれている絵本に出会っていく必要性を取り上げていることである。また、知的障害、言葉の遅れ、言葉が理解できない、そういった「障害」に対して面と向かって本の大事さを唱えたことも特筆される。本とは文字や言葉がつまっているものであり、そこにたどり着けないような「障害」のある子どもたちは、本とは無関係に思われるところがあった時代である。この子たちには言葉や文字が理解できないそれぞれの理由が有り、そこを理解しバリアを取り除き、配慮した本があれば、本を楽しみ、本から学ぶことができる。ただ、それは決して赤ちゃん絵本でいいということではなく、テーマや装丁などに年齢への配慮があり、かつ読みやすくわかりやすくレイアウトされた本の必要性を、このリストでは世に知らしめている。当時のこの知見の高さは抜きん出たものである。一人の母親として、言葉を持たない、理解しないかと思われるようなサイレント・サンであるダクトール君の中に、トーディアはいつも「ことば」を聴き感じていたのであろう。

トーディス・ウーリアセーターが、世の中に向かってあげた声、それはここで筆者が言葉を変えて説明してしまうよりも、彼女の直接の言葉をここに届けたい。それは、トーディスが先のユネスコレポートのまとめとして書いた文章である。少し長いがその訳文をここに全文記する。

本は子どものことばの発達を促し、教育効果を高めます。子どもに本が必要だということは、研究からも実践からもわかっています。子守歌のメロディーと詩のリズムは子どもの

リズム感を刺激して、自分の身体を意識させます。子どもたち、とくに障害をもった子どもたちは、絵本、わらべ歌、物語、やさしく読める本などを求めています。本は子どもたちの自由な時間を、有意義にすごさせてくれます。子どもたちを幼少の頃から本に親しませてあげたいものです。

本にふれる機会をすべての子どもに与えるためには、障害をもつ子どもたちの、それぞれの障害に十分に配慮した本が必要です。

たとえば次のような本です。

—点字の本、音の出る本、さわる絵本を目の不自由な子どものために。

—大活字本を弱視の子どものために。

—手話のイラスト入りの本を、耳の聞こえない子どものために。

—非常に単純でわかりやすい絵本を、ことばのおくれている子どものために。

—やさしく読める本を、読む力のおくれている大勢の子どもに。

ふつうの絵本の中にも、障害をもつ子どもが楽しめるものはたくさんあります。わらべ歌を集めた本は、その一例です。問題は、親や先生、施設の職員が、そういう本の存在になかなか気づかないことです。

障害児の教育にたずさわる先生や施設の職員や親は、子どもの本についてもっと広く知っていなければなりません。図書館の司書の養成課程で、障害児や障害児の読書について学ぶことを義務づける必要があります。

作家、画家、編集者は、さまざまな障害の子どもたちに接して経験をつんでいる先生や施設職員や親の考えていることを、知る必要があります。障害をもつ子どもたちとつきあって、子どもたちに必要なものは何かを知り、理解して本をつくることが大切な場合も少なくないでしょう。

子どもたちが求めているものを画家、作家、編集者に知らせるのは、教育にたずさわる人たちの課題です。それを受けて何よりもまず、やさしく読めてしかも意味の深い文章を書くことが、作家の仕事です。画家は、文章を理解する手助けとなるような絵を、読む力のおくれている子どもや弱視の子どもの特別な要求に応じて描くことに挑戦します。適切な印刷技術（活字の大きさ、書体、組みなど）を用いて本をつくるのは、編集者やデザイナーの課題です。このようにしてできた本を、求めている人に紹介し、手わたすのは、図書館員の仕事です。

本にかかわる専門職の人々は、〝適切な〟図書を調査した

結果やそのリストを紹介するとともに、障害児が使う本についての情報や、実践活動の報告が、社会に広く知られるようにしなければなりません。「適切な」という一語は、大切な意味をもっています。なぜなら、作者が、障害をもつ子どもを自分の本の中に登場させておきながら、その障害について十分な知識をもっていないことがあり、そういう本は避けなければならないからです。また、作者が子どもよりも障害そのものに目を奪われ、あたかも障害が子どもの全人格を左右してしまうように描く場合にも、特別な注意が必要です。図書館員など専門職の人々の仕事の中で、何よりもまず大切なのは、よい本があることを一般の人に知ってもらい、そういう本が大いに利用されるように、働きかけていくことです。本は私たちに影響を与えます。私たちは、おたがいが人間どうしとして出会えるような本を求めています。私たちの中には、障害をもっている人も、そうでない人もいます。本の中でも実際の生活の中でも、おたがいどうし、知りあうことが大切です。[23]

二人の軌跡がいまどう引き継がれているのか

現在ＩＢＢＹ本部はスイスのバーゼルにあり、ユネスコのカテゴリーＢ（情報・協議関係）に属し、子どもの権利条約に基づいて活動する非営利の子どもと子どもの本をつなぐ世界のネットワークとなっている。

ＩＢＢＹが現在ミッションとしてあげているのは

・子どもの本を通じた国際理解
・世界中のあらゆる子どもたちが文学的・芸術的に優れた本と出会う機会を作る
・発展途上国の子どもたちのための、質の高い子どもの本の出版と普及を応援する
・読書活動の推進と本を届ける活動の応援
・子どもの本の学術的研究
・国連の子どもの権利条約にのっとった子どもの権利の遵守[24]

そして主な活動は

・子どもの本の作者や画家を対象とした、小さなノーベル賞といわれる「国際アンデルセン賞」の選考と授与
・識字・読書普及、貧困や紛争災害地域に本を届けるための活動をする人たちを対象とした「ＩＢＢＹ朝日児童図書普及賞」の選考と授与
・世界各国の新刊本の中から優れた文学・絵本・翻訳を見出す「オナーリスト」の選定とカタログの発行・巡回展実施（隔年）

・障害児図書資料センターでの、Outstanding Books の選定とカタログの発行・巡回展実施（日本では世界のバリアフリー絵本展として巡回）（隔年）。
・災害・紛争地域への本を通じた援助、識字活動
・ホームページ上に IBBY Children in Crisis Fund を開設

そのほか、四月二日を国際子どもの本の日と定め、各国持ち回りによるポスターとメッセージの制作、二年に一度の世界大会の開催を行なっている。

レップマンがまず初めにしたことを思い起こしてみると、図書の展示会であった。展示会巡回は今日でもＩＢＢＹの活動の核となっている。しかもその展示本は各国自身が選書するという原則が貫かれている。本を通じての国際理解・異文化理解といった時、本で他国や異文化を紹介しようとすると、私たちは知らず知らず自分たちの持っているその国のイメージに縛られて、ステレオタイプ的に本を選びがちである。自国での選書で集められる本には、そういった過ちはおきない。また、母語を大事にしていることも、レップマンの意思が守られているが、これも自国からの本の推薦があってこそ貫いていけることだろう。

今年九月メキシコで開催されたＩＢＢＹ世界大会には七〇〇人あまりの人々が世界中から集った。世界中の子どもと子どもの本をつなぐ人たちが集い、実際に顔をあわせて、時や場を共有し、討論し、交流し、時には食事を共にし、一緒に笑い合い、歌い合い、そのことでお互いが信頼し合える存在であるという確信が持てること――子どもと子どもの本を取り巻く人たちの「協調」のために国際会議の場を持つという、レップマンの着眼のすばらしさを大会に出席するたびに確かに実感する。

ＩＢＢＹ障害児図書資料センターはオスロ大学内の特殊教育研究所に一九八五年設立後、ニナ・ライダーソンをセンター長とし二〇〇五年までトーディス・ウーリアセーターもそのプロジェクトに加わりながら、障害児図書のアイディアバンクとして活動の基礎を作り、ニナの退職とともに、センターは同じノルウェーのハウグ特別支援学校図書館内の資料センター内に移った。司書のハイジ・ボイエセンが二代目センター長を務め、この時点で、三十ヶ国四十二言語、約四千タイトルの資料を有していた。さらにハイジの退職で、二〇一四年春、センターは北欧を離れ、カナダ、トロントの公立図書館内のＩＢＢＹ障害児図書コレクションコーナーにすべての資料を移した。

現在のセンターの主な活動は、解説書付きのカタログ発行と展示会というトーディスの引いた軌跡を踏襲している。本は隔年事業でＩＢＢＹ各支部に呼びかけて公募し、その中から Outstanding Book リストを作り、その本をまずボローニャの児童図書展で公開し、その後、希望の国を巡回する。リストアップさ

れなかった本も、各国が寄せた図書資料はすべてセンターにコレクションとして保管されている。このセンターのコレクションの特徴は、世界各国から優れた良書を集めたということだけではなく、新しいアプローチを積極的に紹介していること、アプローチは特に目新しくなくとも、その国その地域で、初めて取り組まれた出版や研究などにも着目していることが挙げられる。また、特筆すべきは、障害児図書というと障害児に関する本（About）、障害児のための本（For）のみに目を奪われがちな中で、一般市販絵本の中に、「障害」や異文化を超える図書を見出すことをプロジェクトの大きな柱としてきた。つまり、隔年でＩＢＢＹ支部に送られるOutstanding Books Submissionsの募集要項には以下のような三つのカテゴリーがある。

〈カテゴリー一〉特別なニードのある子どもたちのために特別に制作された本

〈カテゴリー二〉一般に市販されている芸術的にも文学的にも質の高い絵本で、かつ、特別なニードのある子どもも、読みやすい条件を兼ね備えた本

〈カテゴリー三〉障害のある子どもや大人が描かれている図書[25]

筆者は特にこのカテゴリー二を含むプロジェクトであることを高く評価したい。本を通じた社会参加、インクルーシブな社会を願う理念がこのプロジェクトの根幹にあること、このことこそ、トーディスが息子ダグトール君と共に生きながら、「どう生きていくことが、「障害」のある人々にとって大事なのか」考えつづけた答えなのだろう。筆者はこの展示会実行委員長であり、日本各地で巡回展示会を実施している。二年に一度展示本は更新されるが、展示会では、毎バージョン二十ヶ国ぐらいから五、六〇冊選書された本が並ぶ。この展示会は、北欧のノーマライゼーションと、ＩＢＢＹの子どもの本はボーダーを超え、異なったもののあいだに橋をかけるという両者の理念が具現化されたものである。どの国、どの文化、どのような社会であろうと、いまの自分たちの立ち位置から、世界の国々から選ばれた本を実際に手にとって見ることで、自国の状況を客観的に見て、課題を知ることができる。自国の本だけでは知りえないことを世界の本から具体的に知ることができる。そしてそれらの本が、信頼する仲間が選んでくれた本であるという安心感は大きい。

「障害」は多様なものであり、一冊の本が全ての問題を解決できるわけではないが、様々なアプローチを知ることで、出版や読書活動に生かしていくことは可能である。こうした本は、制作や出版や販売の過程でも多くの障壁（バリア）にぶつかるが、関係者の努力でそれらを乗り越え、一冊の本として結実していく。展

示会は、これら関係者の努力への励ましともなる。この分野の本の存在や必要性をもっと広く知らしめ、そしてさらなる研究開発が進み、「障害」がある子どもの読書環境に対する理解や知識がより深まること、新しい本の出版や、販売促進に関するアイデアを示すことを願って展示会を実施している。

■注

1 日本ユニセフ協会の子どもの本の支援「ちっちゃな図書館プロジェクト」については、以下のWEBで報告されている。
<http://www.unicef.or.jp/kinkyu/japan/pdf/uf_6_report_j_all.pdf>

2 〈3・11絵本プロジェクトいわて〉活動報告（二〇一四年八月二十四日現在）
開梱済み件数：五八三八件、二三万二五四八冊。
配布済みの絵本：三〇六ヶ所、一〇万九〇〇〇冊。
活動支援金の合計：二五九〇万九九六五円。

3 被災地の子供たちのために集まった本の数がどのくらい膨大な数であったか、実践女子大学・実践女子大学短期大学部の児童書の総蔵書数を参考に記載してみる。
児童書一九〇三冊、絵本一八二七冊（二〇一四年十一月現在）。
被災地にはもちろんこの二つのプロジェクトのみならず、たくさんの、本の活動をしている団体や人々・学校・図書館・出版社から本が届けられたり、本に関するイベントが開かれたり、図書館が建設されたりした。

4 イェラ・レップマン著、森本真実訳『子どもの本は世界の架け橋』こぐま社、二〇〇二年、p. 25。

5 森本真実「子どもの本の架け橋」こどもとしょかん第八十八号（二〇〇一年冬季号）東京子ども図書館、p. 11-12。

6 前注4、p. 48。

7 前注4、p. 53。

8 前注4、p. 55-56。どんな本が二十ヶ国から寄せられたかは、以下図書展が開幕した日の朝の、ケストナーが各新聞に掲載した時の挨拶から読みとることができる。
「……私は豪華な出席者リストの中から、何人かのお名前を書き写してきましたので、ここにみなさんにお伝えしたいと思います。……北ドイツからはオイレンシューゲル氏、ほらふき男爵ミュンヒハウゼン氏、親指小僧氏、ハーメルン笛吹き氏、フランクフルトからはもじゃもじゃペーター氏、シュレージエンから山の精リューベサール氏、フランスからはムッシュー青ひげ、イギリスからは小公子フォントルロイ公、ミスターロビンフッド、ロビンソン・クルーソー、ガリバー、ディヴィット・カバーフィールド、オリバー・ツウィストの各氏、インドから

サヒブ・キム、アメリカ合衆国からモヒカン族のホークアイと黒人のアンクル・トム、デンマークから毅然としたすずの兵隊……有名な動物たちもやってきてくれました。長靴をはいた猫、はなのすきなうしフェルジナンド、ミッキー・マウス、くまのプーさん、ライケル狐、猫のシュピーゲル。お姫さまや王さま方、妖精、炭焼き、宝捜し人、魔女、船長、英雄、魔法使い、この開会式に出席したこれらの人全員の名前と出身地をあげていたら紙面が足りませんので……彼らに会いに来ることができます。……」

9 前注4、p. 58。

10 前注5、p. 14。

11 前注4、p. 86。

12 前注4、p. 90-91。

13 前注4、p. 105。

14 前注4、p. 208。

15 ガンツェンミュラー文子「本と子どもと大人をつなぐ場所〝本の城〟（IJB）での二〇年」国立国会図書館国際子ども図書館デジタルコレクション（電子書籍・電子雑誌）二〇〇九年十月二十四日。

16 障害の表記について。「障害」と言う表記を使用する。「障害」は、個人の身体の中にあるものではなく、社会的な関係の中で生じていくもの、捉えるべきものと考えている。カギカッコは、障害とは何か、問い直していこうという意味で、筆者は四十年間このようにつけて使ってきた。

17 ウーリアセーターは「ホーム」という言葉を使っている。日本の施設の形態に当てはめると、「グループホーム」という形態が近いものであろう。

18 Tordis Ørjaseter, BOKA OM DAG TORE (My Silent Son), J.W. Capplens, 1979.

19 T・ウーリアセーター著、藤田雅子訳『マイ・サイレント・サン：自閉症の息子からのメッセージ』ぶどう社、一九八九年。

20 Books and disabled children, The International Board on Books for Young People, 1981.

21 中島信道「布の絵本・さわる絵本の海外での反響」、『JBBY会報』No. 23、一九八二年四月。この中島氏は当時偕成社の編集者。その後偕成社では、ボローニャでの展示に先駆けて、一九七九年の国際児童年の記念事業として〝布の絵本・さわる絵本展〟を編集部長鴻池守氏の提案で朝日新聞厚生文化事業団の主催、偕成社協力で大都市を中心に実施。それから一九八六年まで毎年実施された。

22 解説書付きのカタログ発行と展示会は、その後一九八五年、一九九一年、一九九九年、二〇〇一年、二〇〇五年、二〇〇七

年、二〇〇九年、二〇一一年、二〇一三年と今日まで継続して実施されている（原則隔年事業）。二〇〇二年には、ＩＢＢＹ設立五十周年を記念して、センター総コレクションから四十三点を選書した記念展とそのカタログも発行されている。日本支部ＪＢＢＹではこの記念展から以後の展示会を「世界のバリアフリー絵本展」として国内巡回展示会を行っている。カタログも邦訳版を発行しており、さらに点字版も毎回発行している。

23 トーディス・ウーリアセーター著、藤田雅子・乾侑美子訳『本はともだち』偕成社、一九八九年、p. 112-116。

24 ＩＢＢＹホームページ＜http://www.ibby.org/index.php?id=about＞「What is IBBY?」より。

25 ＩＢＢＹセンターより各国支部に送付される OUTSTANDING BOOKS FOR YOUNG PEOPLE WITH DISABILITIES Project description より。

■参考文献

イェラ・レップマン著、森本真実訳『子どもの本は世界の架け橋』こぐま社、二〇〇二年。

島多代「レップマンとＩＢＢＹ」『こどもとしょかん』第八八号（二〇〇一年冬季号）、東京子ども図書館。

森本真実「子どもの本の架け橋」『こどもとしょかん』第八八号（二〇〇一年冬季号）、東京子ども図書館。

真壁吾郎「ぼくたちに本を、翼をください！～イェラ・レップマンの人を動かすことば～」『Book & Bread』（ＪＢＢＹ四〇周年記念特大号）、日本国際児童図書評議会、二〇一四年。

Ｔ・ウーリアセーター著、藤田雅子訳『マイ・サイレント・サン：自閉症の息子からのメッセージ』ぺりかん社、一九八九年。

Øjasæter, Tordis. The Role of Children's Books in Integrating Handicapped Children into Everyday Life. Unesco, 1981, (Studies on Books and Reading No. 1).

ＩＢＢＹホームページ「How It All Began」＜http://www.ibby.org/index.php?id=398＞

ＩＢＢＹホームページ「HISTORY Books for people with disability」＜http://www.ibby.org/index.php?id=1361＞

ガンツェンミュラー文子「本と子どもと大人をつなぐ場所〝本の城〟（ＩＪＢ）での二〇年」国立国会図書館国際子ども図書館デジタルコレクション（電子書籍・電子雑誌）二〇〇九年十月二十四日＜http://dl.ndl.go.jp/view/download/digidepo_1166391_po_2009-07.pdf?contentNo=1&alternativeNo=＞

トーディス・ウーリアセーター著、藤田雅子・乾侑美子訳『本はともだち』偕成社、一九八九年。

偕成社社史『偕成社五十年の歩み』一九八七年。

The International Board on Books for Young People, BOOKS FOR LANGUAGE - RETARDED CHILDREN - An annotated bibliography compiled by the International Board on Books for Young People (Studies on books and reading, no. 20), United Nations Educational Scientific and Cultural Organization, 1982.
今村廣「国際障害者年セミナー報告」、『ＪＢＢＹ会報』No. 20、一九八一年四月。
中島信道「布の絵本・さわる絵本の海外での反響」、『ＪＢＢＹ会報』No. 20、一九八二年四月。
布の絵本研究連絡会編『手作り布の絵本　さわる絵本――その明日のために』偕成社、一九八〇年。

（かくあげ・ひさこ／実践女子大学兼任講師・日本国際児童図書評議会）